中国の映画と近代アジアの映画

近代アジアの 映画産業

648頁 青弓社 [本体 8,000円 + 税]

た中国近現代史と言える新しいジャンルを開かれた。 二二四頁)によって、その方法を展開され、 られるのではないであろうか。藤井氏は、 歴史を回顧すると同時に中国現代史を散策する場合が多く見 中 『中国映画を読む本』(朝日新聞社、 玉 |映画 一―二四五頁)を参照し、現代中国の一○○年の映画の の映画と言えば、 百年を描く、百年を読む』(岩波書店、二〇〇二年 中国研究者の多くは、 一九九六年五月、 同書の数年前にす 中国映画から見 藤井省三氏の

る上で貴重な史料を提供している。 出版社、 ついては魯海氏と律雪雲氏の共著になる『青島與電影』 にあった青島における映画史も看過できない。その映画史に 中国における映画史を知る上でドイツ及び、日本の占領下 二〇〇七年一〇月、 一—一七四頁) があり、 映画史を知 (青島

章

中

名、派拉蒙影业公司 (Paramount Pictures, Inc) として知られる。 設立され、 発展した上海も、 在の福州路附近に映画館が建設され、 上海では映画が一九世紀末に上映され、二○世紀初期には現 ラマウントは一九一二年にフェーマス・プレーヤーズとして 静安寺の近くにパラマウントの看板を見ることができる。 南京条約により五港が開港され、その一港として急速に 菌 の映画史での重要な舞台となる地の一は上海であろ 一九二七年に社名をパラマウントに改称し、 重要な映画の舞台である。今日でも上海の 中国映画の歴史が展開

笹川氏は先に『明治・大正 そのような中国映画も含め、 していったかを叙述したのが、 大阪映画文化の誕生 アジアの映画がどのように展 笹川慶子氏の本書である。 一口ーカル」

開

したとされる。

近代アジアの映画産業

笹川慶子著

ここで紹介する『近代アジアの映画産業』である。 紀前半の東アジア、東南アジアに広げて、まとめられたのが、 業の誕生とその展開を明らかにしたが、さらに視野を二○世 二〇一四年三月、 な映画史の地平にむけて』(関西大学大阪都市遺産研究センター、 一一二七五頁)を著し、 大阪における映画産

発展史に視野を広げ、 究し、その後、関西大学に赴任して、アジアにおける映画の 笹川氏は、早稲田大学で映画史および日本映画産業史を研 アジアにおける映画の配給がどのよう



パラマウントの看板(上海静安寺附近)

に展開されたかの問題探求に邁進してこられた。

配給のテーマに切り込んだ意欲的な著作である。 成果と言えるであろう。近代アジアにおける映画産業、 本主義の産物である。」(一七頁)と書き始められているよう 本書のはじめにおいて、 本書は、映画のとくに「資本主義的」面から考察された 笹川氏は 「映画は、科学技術と資

が付されている。 が六章から構成され、最後に主要参考文献(六一三―六四〇頁 本書は序章と三部構成、 第一部と第二部が各五章、 第三部

巨大テーマパークであるユニバーサル・スタジオ・ジャパン にユニバーサル映画のアジア展開を究明する。大阪における 序章は、アメリカ映画の日本への進出から述べられ、 とく

世紀前半の日本の植民地となった朝鮮や台湾にどのように映 うに関係していたか。 生とアジアにおいて、とくに帝国キネマ演芸が大阪とどのよ として、東京に次ぐ映画の消費地であった大阪映画産業の誕 視点により、 妻三郎と大阪との関係並びに大阪の映画企業との関係を視応 同社がアジア市場に進出していく経緯を解き明かす。 (USJ) とアメリカのユニバーサル社との関係から始まり、 本書の第一部では、 大阪と映画の関係を述べている。大スター阪東 大阪における映画文化の誕生や、 映画の製作から配給、 興業、 消費との

画が配給され上映されていたかを探求した。

と近代アジア」(二一三―四三〇頁) を著し、 洋汽船と映画』(関西大学出版部、二〇一六年九月、一―四四 社 シスコと日本、香港を結ぶ航路を開設した。この東洋汽船会 平洋航路を開拓 のが東洋汽船会社である。一八八四年創設の大阪商船会社や クシデンタル・オリエント汽船会社があり、 船会社であった。とくにパシフィック・メール汽船会社やオ フランシスコを拠点にアジアへの航路を開いたアメリカの汽 配 1 期からアメリカの西部ロサンジェルス郊外のハリウッドにお 映 カとの 興亡と日本映 いて述べる。本書に先んじて笹川氏は、 一八八五年創設の日本郵船会社に互し、 !が後援してできた東洋フイルム会社の活動とその展開 !給するには輸送手段が必要で、その役割を担ったのがサン の活動を中心に述べる。 て映画産業が興起してくる。その映画をいち早くアジアへ 第二部では、)関係、 その中で、 本書 H 画 『近代アジアの映画産業』に昇華された。本 本映画史に短期ではあったが、 大正末期 産業との 第二部 日本の汽船会社として初めてサンフラン 関係や横浜 の映画製作に関与した大正 とくに注目すべきは、 「東洋汽船の映画事業 を執筆してい での映画産業とア 東洋汽船会社は北太 松浦章と共著で それに対抗 二〇世紀初 その大正活 る。 映画産業 それら 活 三頁 メ につ 映 ij 0

ブロツキーの映画製作と彼の中国、日本、アメリカでの活動題、またこの時期にアジアで活動した映画人ベンジャミン・書は、さらにハリウッド映画の勃興とアジア展開に関する問

日の映画社の興亡を述べる。 第三部近代アジアでの欧米日の映画産業を展開した欧米 について活写した。

などについて活写した。

亜共栄圏」構想のもとにアジアに進出する日本映画との競業に映画普及を拡大していったかを究明する。ついで、「大東に映画普及を拡大していったかを究明する。ついで、「大東会社より遅れて進出しできたアメリカの映画会社がどのようのマニラに進出し映画を普及させ、そのマニラに欧州の映画のマニラに進出し映画を普及させ、そのマニラに欧州の映画のマニラに進出し映画を普及させ、そのマニラに欧州の映画のマニラに進出しいでは、

れていた。 映が先行し、一九一〇年代以降に遅れてアメリ 事情を究明した。 の中で中国映画に関する唯一の一章であると言える。 のである。 カ合衆国商務省等の報告に依拠して、 第四章 とくに欧米諸 「アメリカ/上海から見る中国映画 一九一三―一九二一年にアメリカ大統領であった 九一〇年代以降にア 中国では二〇世紀初期には欧州 国の居留地となった「租界」 ゚メリ 力映 中国とくに上海 画 が進出 市 カ映 場 地 区で上映さ 0 一面が進 峡 が、 アメリ てくる 画)映画 0) 出 H

ある。 のは、 から、 ゥ 後、 構築できなかったため 遅滞と大衆市場開拓に必要な廉価な映画を提供できる方法を にはアメリカ映画 喜劇性の高い映画が中国で嗜好されたとする。しかし、 0 ッド 有能なセールスマン」(本書五三四頁)と唱えたとされる頃 中国史料などを参照されさらなる探求を希求するもので アメリカ映 漸次アメリカ映画が中国市場に進出してきた。とくに ロウ・ ウイルソンが「ハリウッド映画はアメリカ製品 画 の専門館の開設が遅遅として進まなかった 「の輸送や資本提携、 (本書五四八頁) と指摘されるが、今 劇場運営など改善の 上海

れ、 青島では一一の映画館があり、 に中国人による映 て一九〇五年には中国 館を建設し、 本が青島を占拠 になると中国人の映画鑑賞が行われ、そして一九一四年に日 の水兵を対象とし水兵倶楽部において上映され、一九一二年 九三一年には 次世界大戦以降は日本が進出して、一九〇七年にはドイツ さらに青島のように、一九世紀末にドイツに占領され、 一九二一年に英国人が「中西電影院」と呼称された映画 西方の映画が上映されていく。 《歌女紅牡丹》が上映された。一九四〇年代の 公画館 一九一七年に日本映画上映館 の 山 映画が誕生して、 ・東大戯院」が誕生した。 中国でも代表的な都市であ 一九三〇年代初め これと平行し が設立さ そして 第

メリカ映画の拡大の叙述が少ない点である。本書に惜しまれるのは中国市場における欧米映画とりわけアた(魯海・律雪雲《青島奥電影》一―三頁)。この一例からも、

であろう。

首都 拡大可能であると言える。 州 研究にも大きな刺激を与えた。本書の視点や研究方法を応用 て頂きたい。しかし本書の刊行は、 用意されていないことである。 とくに残念なことは、これだけの大作でありながら索引が さらに南京条約以降の開港された五港の広州、 寧波、上海を含め、 の北京や長江中流域 その後の開港の天津や青島、そして の漢口などその研究の余地はさらに それらの分野を志す学徒にとって 再版の際には是非とも準備し 今後の中国における映 厦門、 画

(まつうら・あきら 関西大学東西学術研究所客員研究員)

も有用な指針となる成果と言える。